

田宮虎彦集(新文学全集(5))

田宮虎彦集

新文學全集

河出書房

集 彦 虎 宮 田

新文學全集 第五回配本

昭和二十七年十一月五日 初版印刷
昭和二十七年十一月十日 初版發行

定價 二三〇圓
地方賣價 二四〇圓

著 者

田 宮 虎 彦

發 行 者

東京都千代田區神田小川町三ノ八
河 出 孝 雄

印 刷 者

東京都青梅市根ヶ布三八五
山 田 一 雄

發 行 所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河 出 書 房

電話神田(25)三一七四番

精興社印刷・加藤製本

霧の中	一二三
菊の壽命	一〇〇
落城	七五
物語の中	六〇
足摺岬	四一
菊坂	二二
繪本	三
目次	

三	界	一四
江上	一族	一五一
此のひと	すぢ	一七〇
異母兄弟		一八四
幼女の聲		二〇五
あとがき		二二九
年譜		二二〇
装幀	脇田和	

田宮虎彦集

繪 本

麻布霞町の崖下にあつた私の下宿には、三聯隊の起床ラッパが遠くかすかにきこえて來た。それは、青山墓地の崖肌を這ひ木々の下枝をぬつて、切なくなしげに聞えて來ては、しばらくはしめつばい餘韻を私の耳にまつはらせるのだつた。

私は大學にはいつたばかりであつた。といふより、やつと大學まで辿りつくことが出來たばかりといつた方がよかつたであらう。三聯隊の起床ラッパがきこえて來るのは、そんな私が夜通し謄寫版の原紙をきりつづけ、やつと冷たい蒲團にくるまつた頃であつた。私は、これからつづく大學の三年間を、その謄寫版の原紙きりの仕事だけで支へていかうと眞面目に考へてゐたのであつた。

大學にはいつたといつても、既に父にさからつて家を出てゐた私には學資の出るあてはなかつた。しひていへば、母が父にかくれて送つてくれる金があるにはあつたが、それもあてに出来る金ではなかつた。ひと月に一度かふた月に一度、母は、手紙にしのばせて一枚の五圓紙幣を送つ

てくれるのであつたが、もし父にみつけられたとしたら、母が父から受けねばならぬ折檻がどんなものか、その父の折檻に苦しめられつづけて家を出た私にはいやといふほどわかつてゐたし、よし父にみつけれぬまでも、母にそんな金を私に送る餘裕などないことも私は知つてゐた。母はその金をつくるために、父にかくれて近所の縫ひものをひきうけたり、手紙の代筆をしたりしてゐるに違ひなかつた。それが病弱な母の生命を削つてゐることも私にはわかつてゐた。私は出來ればその金をあてにすることも私にはわかつてゐたのだ。大學の試験に合格した時、私は一度、母にもう金はおくつてくれるなと手紙を書いた。どうしようといふあてがあつたわけではなかつた。あるひは、それは、大學にはいつたといふ私のはかない見榮であつたかもしれない。だが、母から來たその手紙の返事には、やはり五圓の紙幣が、どうか無事に大學を卒業しておくれと書いた便箋に折りこまれて入れてあつた。私は、その母の文面と五圓の紙幣とをみつめながら、心の中では、そのお金を送りかへすことの出來ぬ自分をみつめつづけてゐたのであつた。

三聯隊の起床ラッパがきこえる前に、私の隣りの部屋にゐた中學生が起きだすのだつた。息をひそめるやうにして身支度をしてゐる中學生のけはひが、耳にきこえる音ではなく、風のやうに私の肌に感じられた。私は原紙をきる鐵筆を置き、しびれるほどに疲れた右手の指を左手の指でも

みほぐしながら、中學生が木戸をあけて表に出てゆくのを待った。そして、その登音が表通りに消え去つてから、私は立ち上り、寢る支度にかかるのだつた。私が冷たい蒲團にくるまつた頃、聯隊裏の崖下を一番電車がレールを軋ませて近づき遠去かつて行き、やがて遠く切ないラッパの音がきこえて来る――

それは、私が幼なかつた頃から教へこまれてゐた――新兵さんよ起きろよ、はよ起きろ、おきなきや古參兵に叱られる、といふ起床ラッパの節には違ひはなかつたが、私には勇しい軍隊の起床ラッパとはきこえず、何故かものかなしい思ひをそそのやうにきこえて来るのだつた。そして、私は浅い眠りにひきこまれてゆくのだが、私がその眠りからめざめるのは九時近い頃であつた。下の五つになる女の子が土間からかけられた急な狭い梯子段を中ほどまで上つて来て、

「コケコツコウ、ヨガアケタ」

といふ遊び聲を一人で幼くくりかへしてゐるのが、私の耳に次第にはつきりときこえて来て、私は眠りからめざめるのだつた。女の子のその遊びは、九時近くまで寢てゐる私へのあてつけでは勿論なかつたであらうけれど、私には、やはりそれと同じ役目をはたした。私は起きて、ぬるい味噌汁で朝飯をかきこみ、また昨日と同じ一日を型のやうにくりかへしはじめるのであつた。

その下宿をやつと探しあてるまで、私は一緒に大學を受

けた西野といふ高等學校で同級の友人のアパートにゐた。大學の入學試験が終つても歸つてゆく家のない私は、西野のためにアパートを探すといふことで幾許かの金を西野から貰ひ、東京に居残つた。見晴しのよい、二間か三間つづきの、靜かな、きれいな……といった様々な條件を西野はいひのこしていつた。私は地圖をたよりに東京の町を數日あるきまはつて、やつと西野のいひのこした條件になつたアパートを見つけ出した。そこだが、さうざうしい東京の賑ひから置き忘れられたやうに、靜かな木立にとりかこまれてゐた。その木立がこぶしに白くいろどられ、やがて櫻の花びらにうづもれ、新緑にかはつてゆくのを、私は、茗荷谷ハウスといふそのアパートの西野の部屋からながめながら、西野の上京を待つた。

アパートの西野の部屋は、西野がいひのこしていつたとほり應接間をかねた書齋と居間のほか、厨房と厨房のわきに納戸のやうについてゐる三疊まであつた。そんなアパートを探すこともむづかしいことではあつたが、私が借りることの出来るやうな下宿をさがすことは、なほ一層むづかしいことであつた。それはどんなに狭くても、またどんなに汚くてもよかつたけれども、ただ、それを借りる金だけが問題であつたのだ。私は西野の上京を待ちながら、毎日、自分の下宿をさがしあるいてみたが、いつか、私には部屋を借りることなど不可能に近いことのやうに思へはじめて來た。そして、もしや西野が納戸の三疊を、私に貸し

てくれはせぬかといふ甘い夢を心に描くやうになつてゐた。

それは全く望みのないことでもなかつた。西野がさまざまな條件を私にいひおいて行つた時、冗談であつたかも知れぬが、もし廣いアパートをみつけることが出来たら、御禮に私をその一部屋においてもいいといつたからである。私は西野を待つた。だが、西野は上京してくると、もはや奴僕は必要なくなつたといつたやうに私の願ひをききいれようとしなかつた。

私がやつと墓地下の下宿をみつけ出して來た時、麻布霞町六番地——といふ下宿の所番地を西野に上げると、西野は、

「ほう、麻布霞町、ブルヂョワやがな」と嘲けるやうにいつた。

私は、西野の上京する十日程前から、神田淡路町の明文社といふ謄寫印刷に働きにいつてゐた。私にその下宿を世話してくれたのは、その謄寫印刷で手を眞黒にして刷り屋をやつてゐた渡邊といふ老人であつた。老人はその時、私に、

「下宿代はたのめば少しはまけてくれるだらう」といつてくれた。老人の教へてくれた月十三圓といふ下

宿代は、西野の借りてゐるアパートの部屋代の三分の一にも足りぬ額であつた。東京中を探しあるいた私には、二食をつけて十三圓といふその下宿代は、最低といつていい額

であるとわかつてゐた。私は、勿論、そんな下宿代までを西野につげたわけではなかつたが、下宿のあつたことを西野に話した時、西野から——ほう、麻布霞町、ブルヂョワやがなとかへされた時、瞬間、私はぎくつとした。その西野の言葉に渡邊老人のいつた十三圓があるひは部屋代だけの間違ひであるかもしれぬといふ思ひが、私の心を稲妻のやうに走つたのだつた。

しかし、渡邊老人は、たしかに朝夕二食をつけて、といつた筈であつた。さうはつきり思ひかへすと、今度は、私の心に、奇妙な幸運が自分に恵まれてゐるのではないかといふ思ひが、みるみる大きくひろがつていつた。だが、翌日、私が渡邊老人から教へられた道筋をたどつてゆくと、なるほど麻布霞町は堂々とした邸町ではあつたが、その邸町の崖をおりた六番地は、やはり貧しい私にふさはしいごみごみとたてこんだ家並がつづいてゐた。私の心の中にふくらんでゐた夢のやうな幸福は、忽ち消え去つてしまつたが、その失望の裏で、私は却つて何とない安堵を感じて、ほとと力のない微笑を頬にうかべてみたのだつた。

私が渡邊老人からの手紙を、背の低い内儀さんにわたすと、内儀さんは眼で、私に急な梯子段をさして、

「むさくるしいが、お上りになつて」

といつた。部屋は渡邊老人のいつたやうに四疊半であつた。だが、妙に細長く見えた。それは、あとで私に納得がいつたのだが、隣りの中學生のゐる部屋をつくるために、

黄いろく日に灼けた古疊が不揃ひに狭くきられてゐたからであつた。その隣りの部屋との間は襖でなく、四分板がうちつけられてあつた。私は渡邊老人から聞いて來たやうに、

「下宿代を何とかもう少しまけてもらへないものでせうか」

といつてみた。その私の言葉をきくと、内儀さんは、さつと暗い翳をその頬に走らせて、へたへたと私の前に腰をおとした。そして、私をみあげながら、

「高すぎるでせうか、物は高いし、それに——」

と悲しげにいひよんどんから、

「子供がわづらつたりしてゐるもので」

と、いひわけでもするやうにつけ加へた。

さういへば、内儀さんが針仕事をしてた奥に蒲團がしいてあつて、誰か寝てゐたやうであつた。内儀さんは返事をせぬ私に物價の高いことをくどくどくりかへしてゐたが、やがて、唾をのみこむやうにしながら、

「五十錢だけおひきしませう」

とやつといつた。私は、内儀さんの頬がその瞬間、みにくくひきつれるのをみた。そして、私自身の頬も同じやうにひきつれるのを意識しながら、私はぎこちなく、

「それではお願ひします」

と、力なくいつてしまつてゐた。私は一圓ぐらゐひいてもらふつもりであつた。だが、内儀さんがひかうといつた

五十錢が、その家族にどれほど大切であるかといふことを、内儀さんの頬の歪みに、私は感じとつてしまつてゐたのであつた。

下宿の主人は廣瀬隆剛といふいかめしい名前であつた。

五反田とかの工場の外交に出てゐるといふ、やせぎすな男であつた。歳は五十前後でもあつただらうか、とすれば、背の低い、人の好きさうな内儀さんは四十前後といふ年配のやうにも思へたが、時には主人よりも年老けてみえることもあつた。そして、七十近い老婆と、男の子が一人、女の子が三人といふ七人家族であつた。病氣で寝てゐるといつたのは、一番上の男の子で、あとで脊髄カリエスときかされたが、十三歳になるといふのに、その下の十歳の妹よりも小さくしなびた顔をしてゐた。

私が、朝、下においてゆく頃には、主人も、小學校に通つてゐる二人の女の子ももうゐなかつた。そして、病氣の男の子が、六疊の奥の間から、じいつとみつめるやうに私をみた。小さくしなびた顔が、變に大人びた感じであつたが、眼だけは黒眼がちに光るやうに澄んでゐた。私はその男の子の眼差をまともに受けて、朝飯をかきこんだ。きまつたやうに菜つばの味噌汁と澤庵——それがその家の朝食であつた。

私がその少年と話すやうになつたのは、私がこの家にうつつていつてから十日ばかりたつた朝のことであつた。いつものやうに私が下においてゆくと、老婆も内儀さんも

ず、顔を洗ひをはつた私がどうしたものかとまどつてゐると、奥の間から、不意に、

「——さん」

と、私の名をよぶ、絹絲のやうに細く澄んだ聲がきこえた。

私は、はつとした。私は今まで、そんな美しい聲をきいたことがないやうな氣がした。だが、寢てゐる少年のほかに、私をさういつて呼びかける人はゐなかつた。私は、奥の間の少年をのぞきこんで、

「お母さんもおばさんもゐないの」

ときいたが、少年は私の問ひかけには答へず、

「戸棚の中にいつものやうに用意してありますから、お上りになつて下さい」

と、私にかへした。私は、少年のいつたやうに、私のになつてゐる味噌汁の椀と飯茶碗を出して、いつものやうに少年の澄んだ眼のみえるところで朝食を食べはじめた。少年はそんな私をじつとみつめながら、時々何かいひたげに唇のはしをかほそく痙攣させた。私がじつとみつめかへすと、やがて、少年は思ひきつたやうに、

「——さんはいつも何してゐるんですか」

ときいた。やはり美しい聲であつた。私には少年の間ひかけてゐる意味がわからず、

「え——？」

とききかへすと、

「そら、カリッカリッつて音をさして——」
といつた。

「謄寫版の原紙に字を書いてゐるのだよ」

私は、さう少年に答へながら、この少年が、夜ねむれないでゐるのではないかと、ふつと思つて、「あの音がきこえて眠れないの？」

ときくと、少年は青くしなびた顔を一瞬ぼつと紅らめそれから自分ひとりにだけきこえるやうな小さな聲で、

「時々」

と答へた。だが、すぐ、

「でも、晝間寢てゐるから、眠れないんだつてお母さんがいふんです、きつと、さうかもしれませぬね」

と、大人びた返事をつけくはへた。

私はその日から、老婆も母親もゐない時には、朝食をたべながらこの少年といろんな話をするやうになつた。

老婆が時々家にゐないのは、近くの家に留守居にたのまれて行くからであつた。そんな日に、内儀さんが出来上つた仕立物をとけに出かけたりすると、私が起きる頃には、二人とも家にゐないことになるのだつた。私が文春といふその少年から、一家の故郷が東北の小さな町であることや、老婆が内儀さんの母親であることや、その少年が學校で友だちに煉瓦を背中に投げつけられてから病氣になつたことなどを聞いたのは、そんな朝であつた。

もう一年餘りもギブスをはめて寢たつきりになつてゐる

といふ少年は、いつか私のおりてゆくのを人なつつこく待つてゐるやうになつた。じつと寝てばかりゐる頭は剃刀の刃のやうにとぎすまされてゆくのか、私には、少年の言葉が十三歳とは思へないほど大人びて聞える時があつた。内儀さんがゐなくて老婆だけがゐる時など、老婆が私に愚痴をこぼしはじめると、少年は、

「おばあちゃん、おばあちゃん」

と、切なげに老婆をよんでその愚痴をやめさせようと身をもがいた。老婆の愚痴はいつも、廣瀬隆剛といふ主人のことであつた。その主人が人にだまされて失敗するまでは、故郷の土地で一家がどんなに裕福な生活を送つてゐたかといつたやうなことを、齒のぬけた聞きとりにくい言葉で老婆は私に話してきかせ、最後には老婆はきまつて、「隆剛も折角専門學校さいれたけれど、何の役にも立たね」といつて、私をも哀れむやうにみつめるのだつた。

「おばあちゃん、おばあちゃんてば」

さうした話の間中、少年は、老婆の言葉をさへぎらうとして老婆を呼びつづけ、その努力がむなしとわかると、黒眼がちの腫にうつすらと涙をうかべて、かなしげに私をじつとみつめた。

さうした二人の言葉で、私はいつか、この一家の過去と現在とを知ることが出来た。あるひは、それは將來もといつてもよかつたであらう。そして、もつとつきこんでいふならば、あるひは、私自身の現在も將來も、この二人の言

葉の中にちりばめこまれてゐたかもしれぬ。

私の隣りの部屋の中學生を、はじめはこの廣瀬夫婦の長男と思つてゐた。だが、さうではなくて、學生も私と同じやうにこの家の下宿人であることを、やはり、病んでゐる少年からきいて知つた。中學生は夕方近くなると、早朝と同じやうにひそひそと身支度をして出ていつた。新聞配達をしてゐるのであつた。それも私は少年から聞いた。

しばらくは、私はこの中學生と顔をあはせたことがなかつた。日曜日などに四分板の板壁ひとつへだてて隣り同志に坐つてゐても、中學生の部屋からは咳ひとつ聞えず、私が鐵筆で原紙をきる音だけが私の耳に異常に大きくきこえるのだつた。

私が、この中學生とはじめて顔をあはせたのは、私がこの家にうつつて来てひと月近くたつた頃であつた。

崖上の霞町の大きな邸宅の庭には、新緑がゆたかな緑を風にそよがせてゐた。日曜日のことであつたが、いつものやうに私がおそい朝飯をたべてゐると、郵便配達夫が小包を配達して來た。福井義治——隣りの中學生の名宛であつた。それを、私は二階の自分の部屋にかへるついでに、中學生の部屋にもつていつてやつた。表書の字は上手な女文字であり、裏がへすと、おそらくは母親であらう——福井まさ、といふ名前が書かれてあつた。

「福井君、小包だよ」

私はさういつて隣りの部屋に聲をかけた。中學生に似ぬ太い聲がきこえ、むくんだやうな顔がその部屋からのぞいて小包を受けとつたが、しばらくして、中學生は新聞紙につつんだ黒砂糖のひとかけらを私の部屋にもつて来て、「——さん、黒砂糖ですよ、あがりませんか」

といつた。それは、母親の小包にはいつてゐたのであらう。私は、ふと、私の母親の面差を心におもひうかべながら、

「お母さんから？」

ときくと、中學生も、瞬間、青ぐろくむくんだ頬に、ほのかな微笑を走らせてうなづいた。

その日ではなかつたが、それから間もないある日、私は中學生に、

「どうして、君は、お母さんと一緒にゐないの？」

ときいたことがあつた。すると、中學生は、

「親爺も兄貴も死んで、おふくろは妹や弟をつれて田舎の親類をたよつていつてゐるんです——」

と、言ひたくないことをいふ時のやうに、ぼそり、ぼそり區切るやうないひ方で答へかへした。だが、さういひをはると、長い間苦しく心につかへてゐた思ひがその言葉でほぐれ出したやうに、むくんだ顔をぼつと紅潮させて父親たちのことを私に話してきかせた。

中學生の父親は、深川で小學校の教員をしてゐたといふのだった。半年ほど前、急な病氣で死んだのだが、實は、中

學生の兄が、前年の上海事變で戦死したのが父の病氣の原因であつた。その死を悲しんで父は病氣となり、兄の名を呼びつづけて死んだ——。それをいつた時、紅潮してゐた中學生の頬が、不意に土いろに血の氣がひいていつたかと思ふと、ふつと言葉をきつた。そして、しばらく何かを思ひつめてゐるやうに唇をかみしめてゐたが、急に悲しげに、

「兄貴の死んだといふのは、あの肉弾三勇士の廟行鎮の敵の陣だつたんです」

といつた。力のぬけた聲であつた。それから、につと笑ふと、

「貴兄は、ほんとに捕虜になつて、銃殺されたんださうです、それがわかつて、親爺は死ぬ前、天皇陛下に申しわけない、申しわけないといくりかへしてゐました」

と、吐き出すやうにいつた。

だが、私は、中學生といつもさうしたことを語りあつてゐたのではなかつた。中學生と言葉をかはすやうになつたあとも毎日殆んど顔をあはせる機會などなかつたことは、それまでのひと月餘りと同じであつた。ただ朝早く中學生が出かける時、廊下から、呟くほどの聲で、

「いつてまゐります」

と、言葉をかけるやうになつたことだけが、以前とかはつてゐたといへばいいた。

中學生の部屋は私の部屋よりまなほひどかつた。それ

は、部屋といへるかどうかもわからぬほどであつた。私の部屋との間仕切りの四分板をうちつけた板壁が、中學生の部屋では一番まとりな調度のやうであつた。私の部屋から削りとつた二尺に足りぬ細長い窓から、晩春の明るさが、天井もなく荒壁の壁土がむき出しになつた板敷の部屋に、妙にものうく流れ込んでゐた。中學生はその部屋で、毎日、英語や數學の受験參考書をむつつりとよんでゐた。母親の歸つてゐるといふ田舎に近い高等工業を來年受験するといふのが、中學生の希望であつたのだ。

中學生は夕飯は新聞販賣舗で出されるのを食べるといつて、下では朝食しか食へなかつた。それまで夕方にも私と顔をあはせなかつたのはそんなわけであつた。

私は、材木町の停留所から、7といふ系統の電車にのつた。それは青山六丁目から六本木、溜池、田村町をとほつて馬場先門、京橋と往復する系統であつた。私は、本郷の大學に行く時には、その電車を、京橋の終點までのつて、駒込行にのりかへたし、神田淡路町の膳寫印刷にゆく時は、日比谷で上野行にのりかへた。九時をすぎた電車はもうすいてゐた。私はほとんどいつも腰かけることが出来るのであつたが、電車が六本木から今井町、福吉町へかけ下る坂道にかかると、私は何とない安心を感じて、いつも、きまつてうつらうつらしはじめた。電車の震動と、晩春の暖かい日差が、眠りの足りぬ私にこころよい睡氣をさそつたからであつた。

だが、うつらうつらするといつても、それは、せいぜい電車が田村町の交叉點にかかる頃までであつた。時間にすれば僅か十分そこそこのことであつたらう。私は、氣づいて、みるともなく、電車が田村町の交叉點を折れ曲る時の女車掌のするしぐさをみてゐるのだつた。それは、ポールをかけかへる後部車掌のオーライといふ聲をうけて、それを運轉手にしらせ、いそいで前の方の自分の持場の出入口に歸つてゆく、ただそれだけのことであつたが、女車掌はそれが何かたのしいゲームのひとつでもあるやうに、いそいそとしてゐるのだつた。そんな女車掌を見ると、それが何故であつたか私にはわからなかつたが、私は心がたのしくあたたまつてゆくのを感じた。

膳寫印刷では、さまざまな仕事を引きうけてゐた。しかし、私のやうな新しいものには、會社の決算報告といつたまとまつた仕事は與へられなかつた。會合の集りの通知とか、黨半紙一枚ずりの趣意書とかが支配人の手から與へられるだけだつた。さうしたものは端物といつて、刷る數もしてゐたし、同じやうに一枚の原紙をきつても報酬はすくなかつた。だが、それとて、いつもあるわけではなかつた。仕事の無い日には、工場の二階の窓ぎはで、校正してゐる女事務員たちを手傳つて、電車賃ほどの涙金をもらつた。さうして待つてゐるうちに、新しい仕事にありつくことも出来たし、支配人や事務の人と親しくなることが出来るといふはじめた望みもいだけたのであつた。

私が、信濃町のK病院のプリントをひきうけるやうになつたのは、私に、いくらかの獨逸語の知識があつたからだ。それは醫學生への教材のやうに思はれたが、大判ノオトにうづめられた原稿は、私には、たつぷり四五日分の仕事のやうに思はれた。

だが、たとひそんなままとまつた仕事と與へられたにしても、學生の片手間仕事で明文社から貰ふことの出来る金は、下宿代を拂ふのさへカツカツなほど僅かな額であつた。それで食べてゆくには、一日中原紙をきりつづけねばならぬことが私にもわかるやうになつてゐた。一期の授業料も私はまだ大學に納めてゐなかつた。私がいだいてゐた夢は既にはかなくやぶれはじめてゐたのだつた。

ある日、私が、西園寺公爵の邸の横の坂をおりて、謄寫印刷、明文社と金文字をうかした表戸をあけると、支配人が私をみるなり、

「――」

と、私の名をよびつけ、ひきずるやうにそのまま、工場の奥につれていつた。謄寫印刷は間口は二間足らずの小さな店であつたが、洞窟のやうに奥へ行くほどひろがつてゐて、ザラ紙や印刷紙をうづ高くつみ重ねた薄暗い奥に、刷り屋たちが眞黒になつて忙しく謄寫版を刷つてゐた。天井からゴムの紐をつるし、印刷インクをつけたローラーを動かすごとに、ゴムの紐がのび、原紙をはさんだ枠が紙にあはさつて、一枚一枚と刷り上つてゆくのだつた。支配人は

私をそこまでつれてゆくと、一枚の紙を私につきつけた。そして、

「駄目ぢやないか、お前のは百枚も刷らぬうちに、こんなに破れてしまつたんだぞ」

と怒鳴つた。

私は、十數人並んでローラーをうごかしてゐる刷り屋たちの眼が、一齊に私にそがれてゐるのを、うつむいたまま感じてゐた。ゴムの指サックをはめた左の手だけで、機械的に一枚一枚紙をめくつてゆくサラサラといふ音だけが私に聞えてゐた。私は、自分自身の聲と信じられぬやうな小さな聲で、呟くやうに、

「すみません」

といつてゐた。そんな言葉が、この支配人に通じないことは私にもわかつてゐたが、その私の危惧通りに、支配人は、「ナニ、すみませんつて、子供みたいなことをいふんぢやないぜ、これは明日納めねばならんのだぞ、どうするんだ、K病院は大事なお得意ぢやないか、これでしくじつたら、お前に、すみませんといつてもらつたところで何になるものか――」

と怒鳴りつづけるのだつた。

「お前は居眠りしながら、原紙きつたらだらう――」

刷り屋たちがとりなしてくれなかつたら、支配人の罵倒はいつまでもつづいただらうが、私は、やつと刷り上つてゐる百二十部のプリントを風呂敷につつんで、信濃町の

K病院に謝りに行くことになった。私は、廣いK病院の午後の構内をIといふ博士の部屋を探していつた。博士は既に歸宅してゐなかつたが、若い助手が、私のいふいひわけをつめたい眼差でいきながら、残りは四五日うちにとどけるやうにいつた。私が、病院前の公衆電話で、謄寫印刷の支配人にそのことをつげると、支配人は電話の奥で、

「ぢや、それも一度書いてもつて来いよ、しかし、それは、サービスだぜ」

といつた。

私は信濃町の驛前から、品川行の電車にのつた。小さな電車であつた。ガタガタと揺れがはげしかつた。神宮外苑や青山御所の木立が新緑にむせるやうであつた。私はその新緑をみつめながら、何となく涙がこぼれて來た。そして、いつか、隣りの部屋の中學生が、

「ねえ、——さん、墓地下の電車の停留所の名前、考へるとちよつと變でせう。そら、青山一丁目から、人が一人も乗り降りしない墓地裏になつて、墓地下になつて、そして霞町——」

といつてから、——墓地裏、墓地下、霞町とくりかへしてゐたのを思ひ出した。私は自分の涙を人にみられまいとして、背をかがめて電車の窓に額をおしつけ、中學生がつてゐたやうに、墓地裏、墓地下、霞町と幾度かくりかへして呟いてみた。電車は青山一丁目をすぎると右にカーブをきつて、レールをキイーツときしませながら、青山墓地

と聯隊との間の谷間の底のやうなところを、市内電車とは思へぬほどのスピードで疾走しはじめた。赤土にまみれた兵隊が三聯隊の營庭を機關銃をかついで走つてゐたり、藥人形に銃剣をつき刺したりしてゐた。

梅雨がいつか降りつづきはじめてゐた。しとしとと絹絲のやうに降りつづけてゐるかと思ふと、急に夏の雨らしくトタン屋根をはげしく叩きつけた。その雨の音はさわがしければさわがしいほど、妙にものわびしい思ひをそそののだつた。堪へがたいほどむし暑い日があるかと思ふと、火鉢のほしいやうに冷えこむ日もあつた。ねつとりと冷たい汗が肌にまとひついて、疊にも壁にも青かびでも生えてくるやうであつた。

そんな梅雨の間も、中學生は、いつもと變らぬやうに、三聯隊の起床ラッパのきこえて來る前に部屋を出ていつた。登音をひそめるやうにして梯子段をおり、裏木戸をあけて出て行くのだつたが、私の耳に、中學生の地下足袋が、ピタピタと雨に濡れた道を踏んでゆく登音がしばらく聞えてゐた。

私はK病院のプリントを失敗してから、明文社の仕事がまたもとどほりの端物しかもならなくなつてゐた。一日中を寝どほしてゐる下の少年には、そんなことがひびくやうにすぐわかつてゐるらしかつた。私が朝起きてゆくと、

「——さん」